3-3　衣装貸与台帳(昭和 8 年以降)

概要

染織祭衣装貸与一覧

主な内容

〈主な貸し出し先〉

・東京白木屋、大阪高島屋、福岡岩田屋、京都三越、神戸大丸、朝鮮他

貸与年度	衣装時代	貸与期間	貸与料金	貸与住所	氏名
8 年度	8 時代全部	5 月～6/30	2,000 円	東京市	㈱白木屋※
〃	〃	11/5～11/6		京都市	日本染織物見本市協会
〃	〃	11/10～11/22	1,000 円	大阪市	㈱髙島屋南海支店
10 年度	8 時代 10 着	9/29～10/19	300 円	朝鮮	㈱丁字屋
〃				京都市	㈱丸紅商店京都支店
11 年度	8 時代 24 着	8/12～8/28	150 円	大阪市	㈱伊藤萬商店
〃				京都市	八木伊三郎
〃	桃山時代 11 着	9/25～10/25	350 円	福岡市	㈱岩田屋百貨店
〃				京都市	㈱丸紅商店京都支店
〃	平安時代 10 着	10/26～11/12	150 円	福岡市	㈱岩田屋百貨店
〃				京都市	㈱丸紅商店京都支店
〃	8 時代 56 着	12/15～1/20	500 円	京都市	㈱三越京都支店
〃				京都市	㈱丸紅商店京都支店
12 年度	桃山時代 11 着	3/9～3/18	200 円	神戸市	㈱大丸神戸支店
〃				京都市	㈱市田商店
〃	8 時代 25 着	7/22～8/20	300 円	東京市	㈱白木屋
〃				京都市	㈱安藤商店
〃	8 時代 40 着	10/5～10/31	500 円	大分市	一丸百貨店
〃				京都市	㈱吉田忠商店
〃	8 時代 25 着	10/11～12/2	500 円	福岡市	㈱玉屋呉服店
14 年度	5 時代 23 着		500 円	大阪市	㈱大丸大阪本店
〃				京都市	㈱丸紅京都支店
15 年度	2 時代 5 着		200 円	京都市	松阪屋京都支店
〃				京都市	㈱丸紅京都支店
〃	3 時代 10 着		500 円	福岡市	㈱玉屋呉服店
〃				京都市	㈱丸紅京都支店

※昭和 7 年 12 月 16 日白木屋大火災。翌年の昭和 8 年 6 月 9 日に改装開店し、その柿落しイベントとして「歴代衣裳展」を開催した。(次ページ「歴代衣裳展」ちらし)

歴代衣裳展解説

京都市が名物染織祭に際し、十數萬圓の巨費を投じて新に作製したる歴代衣裳の豪華版で教育方面の好材料たるは勿論
御家庭御婦人様方の御參考として空前の大展覧會と存じます。

十九日より十七日まで　會場　白木屋　三階

上古時代　機殿參進の織女

皇祖大神の和妙荒妙の神衣を奉織する織女が、紡織の器具を捧げて機殿に參進する姿態を摸したのである。

頭髪は埴輪に存せる髷形、及び垂髪とし、髷には布帛を結び、櫛及び櫻・桃・橘など天然の枝（模製）をさしかざし、垂髪には木綿を被ふことゝした。

衣服は上衣は方領或は襟頭とし、紐にて結び、白地又は紅、黄などの淡色地に、しのぶ紅葉など種々の摺文様（模製）を施したもの、或は染色のみのものを用ひ、之に下衣を加へ、帶は倭文即ち縞織の綿織のものを用ひ、裳は種々の染色のもの又は倭文・摺文様のものなどを用ひ、又紅の下裳をも用ふ。

奈良朝時代　歌垣

歌垣は上古多數の男女が、廣い場所に集り、歌を唱ひ、舞蹈して樂しく遊んだのであるが、奈良時代には男女華やかに裝うて會集し、天覽に供し奉るに至つた。これは當時の婦女が、うち連れて歌垣の場所へ向ふ有様を現したので、服装は當時の婦人の朝服に準じたのである。

頭髪は或は髻を高く立て、或は髷を結ぶなどし、大小の櫛・花鈿・釵子を挿すのである。

衣服の様式は、何れも大體は同じく、表（表着）の上に唐衣を加へ、裙を纏ひ、紐帶を加へ、領布を懸け、襪（足袋）及び履を穿くのである。表着は綾地で、緋・綠・縹の各色に深い淺い差があり、種々の文様がある。唐衣は錦綾或は夾纈などを用ひ、その中には錦の襟並に緣を加へたものもある。紐帶は深淺の紫、又は綾などの羅を縫ひ合せて、これに繡を加へたものであり、領巾は紗地である。

平安朝時代　やすらい花踊

この踊は同末期である近衛天皇久寿元年に、京中の兒女が風流を盡し、藏笛を調べて、紫野社（今宮神社）に參詣した。これを「後狩禮」といふと百錬抄に見え、又年中行事繪巻に高雄寺の法華會に京中の童女が、歌舞を行ひ、「やすらいはな」といふと見えてゐる。この名稱は歌論の一句の終ごとに「ヤスライハナヤ」と唱へたからであらう。

頭髪は何れも垂髪で、綾兩空は巾子に山鳥の尾を挿し立て、紅紫などの風帶を長く結び垂らしてあるのが特徴である。衣服は染色の衣即ち小袖と下着とを襲ね、同じ地の帶を締め、その上に袖を着るのである。袖は、色は各異つてゐるが、櫻樓文様の固地綾を表とし、裏は平絹である。履物は編除の出てゐる下々と稱するものを用ひてゐる。

鎌倉時代　女房の物詣

婦女の神社、佛閣に參詣する姿である。

衣服は色々の絹の小袖及び下着を着け、同じ帶を締め、織物又は綾に目染、摺箔などを施した袿を襲ねて、これを壺折とし、これに紅の懸帶を懸けて後に垂らしてゐる。

この時代には女房は被衣・市女笠等各種の被物を用ひた、被衣は色々の文様のある絹貫を用ひ、履物は下々を穿いてゐる。

室町時代　諸職の婦女

室町時代に於ける、染織關係の職業に從事する婦女の姿であつて、何れも職人壺の繪を基とし、其他の資料を參考としたものであるが、機織・紺搔（紺染）・扇賣・帶賣・絞師（しぼりし染）・絲物師・組師・帖紙賣・白布賣・鑢賣・藍物賣・白いもの賣（白粉賣）・桂女等を撰ぶことゝした。

但し桂女は鮎賣であるが、當時代の特色あるものとして加へました。

以上の服装は、職業によりて、夫々特色があるが、髪は結髪又は垂髪であつて、桂女・紺搔など二三は結髪に白布の鬢巻を飾うてをり、垂髪にも根巻を加へてゐる。

着衣は小袖に下着を重ね、細い帶を締めてゐる。又扇賣・帶賣・帖紙賣・藍物賣など數人は打掛を加へてゐる。この打掛又は小袖は當時の特徴ある形式に據り、染織及び繡の各種を用ふることは勿論、その文様も總文様・肩裾・腰取・片身変りなどの各種を採り、辻が花染・絞り染・摺箔・型摺・摺箔を初め、各種の文様を用ひ、帶にも染織に繡を加へたものもある。履物は下々である。以上の中、桂女は曲物の鮎補を提げてゐるが、其他はそれ〴〵の職業に因んだ畫を描いた扇を持つてゐる。

桃山時代　醍醐の花見

有名な醍醐の花見で、慶長三年三月十四日に豊公及び北政所を始め西の丸・松の丸・三の丸・加賀局・東の御方たちの上臈が醍醐三寶院にて服具を改め、徒歩で花見に出かけられる行装を摸すことゝし、婦人のみを現はした。

服装は、頭髪は垂髪に元結を附け、三枚又は二枚を重ねた下着の上に間着を着け、細き帶を前に結び垂れ、その上より打掛を襲ねるのである。

打掛は間着以下と共に身巾廣く、袖巾狹く短き形式であるが、織物又は綸子等に繡・織染・摺箔・描繪等の各種を用ひて、何れも絢爛たる桃山文様を現はし、その技巧を極め盡したものである。

間着は紅又白の二様とし、その下着數枚は何れも色とり〴〵の地に前述の各種の技巧を加へた美しいものである。

足袋は綸子に打紐を着け、繻草履を穿き扇を持つのである。

江戸時代初期　小町踊

これは七月七日に行ふたから、七夕踊とも言つた。京中の兒女一群をなし、美服を競うて着飾り、大鼓を打ち、小歌を唱うて舞踊したのである。この踊は寛永以前から行はれたやうであるが、元祿頃の風俗に據ることゝした。

頭髪は島田で色純子の鉢巻を締め、造花を挿して飾りとする。

衣服は上着下着襦袢であるが、上着は當時流行し初めた友禪染に繡などを加へ、下着は大形の紅地絞り文様などで、織物の帶を結び、上着は右を袒ぎ（兩肩を脱ぐこともある）、左肩より右へ、帶二つ折の結襟を懸け、足袋は色木綿で、尻切草履を穿くのである。

持物は金太鼓・鹿撥である。

江戸時代末期　京女の晴着姿

江戸時代の末期に當る頃、京都に住める公家（堂上家）・武家・町家の婦女等の晴着姿を摸したのであるが、その時期は同一でない。勿論當時身分ある人の外出には必ず駕輿を用ひたのであるが、すべて徒歩とした。

公家　奥方　掻取に被衣姿

頭髪はおさへ髷とし、肩を引き歯を染める。衣服は紅綸子の間着に白二筋の下着及び襦袢を襲ね、間帶を前に結び丸ぐけをしめ掻取を着て被衣を加へるのである。掻取は鼠色柳シボ地に色糸金糸などの繍を加へたものであり、被衣は紺紗で上紐を懸せて被るのである。

以上何れも詰袖であつてボンボリ（肩）を挿し、袂落しを用ひ、足袋は白で三本鼻緒の緣取三枚草履を穿くのである。

姫君　頭髪はつぶ髷で衣服は練絹の間着に白の下着及び襦袢とし、繻の間帶は後に結び、地赤の繡及び鹿ノ子等染文様の掻取を上に加へ、ボンボリを挿し袂落しを用ひ、五本鼻緒の緣取三枚草履を穿く、被衣は紺紗の振袖である。

武家　奥方　打掛姿

髪をおさ舟に結ひ眉を剃り歯を染める、衣服は間着・下着・襦袢を重ねて掛下帶を結び織物の打掛を着るのである、白足袋に履物は緣取三枚草履で、懸袋を吹め扇を挿してゐる。

町家　娘　紋裾振袖姿

頭髪は島田髷で、衣服は紋付に金色色糸の繡を加へた裾文様の振袖を着け、縮緬の下着並に襦袢を重ね、錦の帶をだらりに結びしごきを垂らし、白足袋に緣取草履を穿く、又箱袋子を懐にし扇を挿してゐる。

以上各時代各種の服装につき、名稱は同一であつても時代と身分とにより、形状様式を異にするものがあり、又文様等に至つては、それ〴〵特色があつて最も留意を要する所であるが、一々述べ盡し難いのでこゝには唯その大要を説明したに過ぎない。